平賀源内全集

下

源孝壽

昭和九年七月十九日印刷
昭和九年七月二十四日發行

（非賣品）

東京市板橋區小竹町二四〇二
平賀源内先生顯彰會代表者
發行兼編輯者　入田整三

東京市本郷區駒込林町一七二
印刷者　柴山則常

東京市本郷區駒込林町一七二
印刷所　合資會社杏林舍

發行所　平賀源内先生顯彰會

解題略

一　戲曲集

神靈矢口ノ渡以下九編の戲曲を集めた。

神靈矢口渡

源内の處女作で、彼れが戲曲家としての力量を認められた著作である。はじめて明和七年正月十六日江戸外記座で興行され、座本は豊竹新太夫であつた。新田義興を題材として五段に分れ、吉田冠子、玉泉堂、吉田一二が補助とあるが、源内の跋文には初段の切と三段目の口とか自分の筆でないと明記してゐる。なほこの起稿の動機に就ては、關根正直氏の小説史稿に

されど其實、新田の神の祠官某は、源内が相識なりしが、ある日某、源内に語りけるは、本祠は畏こくも南朝の忠臣新田義興朝臣の神靈を齋き祀る所なるを、世に知る人稀にして、近來堂宇傾頽し、誰詣する者なきを、何卒して神威の炳焉なるを知らしめんと願ふ也、其許にも、いかで我志を助け給ひてよといへば、源内そは安き事なり、我に一策あり、待ち給へとて別れしが、不日

にして矢口渡の傳奇を作り、操曲に演ぜしかば、俳優藝妓等を始め、大方の人さへ競ひて彼所に參詣し、神垣のうち群集して、荒にし社殿も忽ち修復したりといふ。

と述べてゐるが、饗庭篁村は名著文庫の風流志道軒傳解題に

すべて風來山人の作文は、世の流行人の噂を捉へて工夫をなしたるにて、「神靈矢口渡」も矢口の新田の社、參詣者多く所謂當時の「流行神」なりしゆえ、其緣起めかして神德を述べ、新田大明神を假りて、大入大評判を取りしなり、是をも後には源内の工夫にて、はやらぬ新田明神を新作淨るりによりてはやらせたりと、源内が機智に富みたる一例にする者あれども、是は反對にて機智に富みたる例にはすべきも、新田の社の參詣繁昌は源内の御蔭にあらず、源内お蔭を蒙ふりしなり、其の明證は「武江年表」寶曆年間の記事中に「寶曆末から新田の社に參詣多し、社地に矢を賣始む、詣人求めて守とす」とあり、此書は神社佛閣の祭禮開帳等はもつとも詳しきものなり。源内の「矢口渡」は明和七年の作なり、寶曆末といふを假りに、寶曆年號の終りの十三年とするも、明和七年は夫より八年後なり、以て源内が時好に投ずる工夫者なりしを知るべし。

と云つてゐるので、作曲の動機が判然しないが、上演してから好評を博したことは當時の著作物に散見するところであり、今日までも人口に膾炙せられてゐることは人々の知るところである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

源氏大草紙

時代は建久年間、源頼朝の臣畠山重忠、和田義盛、梶原景時などの人物を題材としたもので、全編五段から成り、源内一人の作である。明和七年八月十九日豊竹東治の座本で、江戸肥前座ではじめて上演せられた。

弓勢智勇湊

この曲は壽永の亂を五段に仕組んだもので、吉田仲治を補助とした。そして明和八年正月二十日江戸の肥前座で發表せられた。

嫩寀葉相生源氏

安永二年四月卅日江戸肥前座で上演せられたもので、座本は豊竹東治である。平治の亂に敗れた源義朝と牛若丸とを題材としたもので、九段から成り、一人の補助者もなく、彼れ一人の作物である。

前太平記古跡鑑

平親皇將門の沒落後の物語を十一の場面に仕組んだもので、安永三年正月十二日吉田專藏が座本となつて江戸結城座で興行せられた。

忠臣伊呂波實記

安永四年七月十五日江戸肥前座で上演せられ、座本は豐竹東治である。題材を赤穗義士にとつて全編を十一場に仕組んだもので、一人の補助もない。

矢口後日荒御靈新田神德

安永八年二月八日江戸結城座で上演、好評を博した神靈矢口渡の後日咄として、他人の勸めによつて綴り出だされたものらしい、七場に仕組まれ、門人の森羅萬象と浪花の二一天作との二人を補助として完成したのである。

靈驗宮戸川

この編は淺草の觀世音の由來を說くもので、全場十一場であるが補助者はない。安永九年三月三日豐竹東治の座本、江戸肥前座で上演されたのであるが、作者の源內は既に歿してゐるから、作者歿

後の發表である。

實生源氏金王櫻

源義朝と常盤御前とに題材をとり完結しないで歿したから、三段目までしかない。源内の歿後二十年、寛政十一年正月江戸肥前座で發表せられ、座本は豐竹東治であつた。

二　補　遺

上集の編纂を了へた後に得た著作、書翰はもとより、上集にもれた詩歌の類までを蒐めた。

病名補遺序

戸田旭山の病名補遺に寄せた序文で、松浦正一氏藏本である、美濃判黑付四枚。

香椒譜

この書は渡邊富三郎氏（著者と同郷の友人であつた渡邊桃源の後）の所藏本で、昭和七年の秋、同家の古書類中から發見されるまで、その書名さへ世に知られなかつたもので、著者自筆の未定稿本で

ある。稿はところ〴〵に抹消があり、付箋が貼られてゐる。本文と番椒五十三種とに、甜番椒一種を附載した圖譜とであるが、その選述の年代は明かでない。原本、美濃判和紙假綴、本文十一葉、圖譜五十九葉、本集には製版の便宜上、本文は稍〻縮寫したが、圖譜はその圖が實物大であることから、これをそのまゝ模寫して二三葉を一圖版にまとめた。

俳諧三十棒

寶暦元年から明和八年まで二十一年のながい間、江戸の俳壇を賑はしたのは、延享二十歌仙(湖中・盤石・和推・存義・有佐・平佐・米仲・祇丞・買明・秋風・樓川・涓北・木髮・旨原・和專・紀逸・再賀・石腸・蝸名・馬勃)を中心とした論爭である。この論爭は雪中庵蓼太か「雪おろし」と云ふ書を公にして、二十歌仙の獨吟を論難したのを、雁宕は蓼摺小義を、漁汶は遲八刻を著してこれを論駁した。この論難を第三者である著者が、芝居の評判記に見たて、頭取・シャレ組・老人組・雪の家手拭組・田舍者・大ゼイ・わるロ組・利屈組・出過者・スキキャウ者などが集まつて、各人の長所短所を滑稽的に批評したのが本書である。そして明和八年の自敍には作者止笑とあるばかりで、この書が源内の著述であることを物語る確證もなければ、止笑の號が源内の別號であると云ふ他の文獻もない。たゞ雪中庵では代々源内の著作と傳へてゐる。さりとて誰一人この說を否とするものもないと伊藤松宇翁から聞い

た。止笑は恐らく源内の一時的の戯號ではあるまいか。今は伊藤氏の説によつて、本集にも採錄することゝした。書名の三十棒は本文の末にいひ得ても三十棒、いひ得猿も三十棒とあることから名づけられたものであらう。表紙に二枚の題箋があつて、中央とその左側に片寄つて貼られてゐる。前者は輪廓のうちに「俳諧三十棒　全」とあつて、後者には

高曼天狗俳諧　全

とあるけれど無輪廓である。そして本文の柱に三十棒とあるから。本來は俳諧三十棒であつて、高曼天狗俳諧と云ふのは刊行後に呼ばれた別名ではあるまいか。原本、半紙本、輪廓竪六寸三分五厘、横四寸四分。序文四葉、本文二十七枚、明和八年渡裏德兵衞梓行。

里笑草

この書は源内の門人である中島貞叔の家に遺存するもので、その撰述の年代は明かでない。同家では源内の著作と傳えて、しかも源内の自筆であると云はれてゐるから今はこの説によつてこの補遺に縮寫して載せた。

石の枝折

この書は里笑草と同じく源内の門人である中島貞叔の家に傳はつてゐるもので、撰述の年代は明和五年の初秋と思はれて。そしてこの書は武藏國子持ノ渡から秩父へ行く道にある秩父道しま子ふへ十一里と記してある一石標について、著者の管見を述べたものである。美濃判、墨付五枚。

畑苗代の傳・米麥種子撰の傳・田畑土燒竈雛形圖

この三種で完結のものであるかどうか明かでない、またその刊行の年代も發兌の書林も判然しないが、原本はどれも半紙半裁の一枚刷りである。本書に收錄したのは森繁夫氏藏を縮寫したものである。

和歌一首

津輕舟云〻の和歌は宮內省圖書寮所藏の百草露卷九の頭書にあるけれども、帝國圖書館藏のそれには見當らないことを斷つて置く。

七言絕句一首

藤井乙男氏所藏の七言絕句一首を書いた源內の筆蹟は、源內の筆蹟の多くが書翰であるに比べて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一層注意を拂ふべきばかりでなく、源内の作詩として最も尊重すべきものである。

東都藥品會引札

この引札は寶暦十二年閏四月十日江戸湯島で開かれた源内主催の藥品會の廣告で、その前年である寶暦十一年十月に各方面へ配布されたものである。引札は和漢兩文で書かれ、藥品會開催の主意、出品者心得、出品物の運搬方法までをこまゞゝと述べたもので、上集五九四頁に載せた藥品會目錄と對比することによつて、一層その價値と興味とを高める。原本大槻茂雄氏藏、和紙、美濃判二枚大、その體裁はこの集に添付した縮刷を參照されたい。

高松藩祿仕拜辭願

この願は故大槻如電氏の新撰洋學年表寶暦十一年の條下に見えてゐるが、舊高松藩の松平家で調査したが、その原本はとにかく、その寫しさへも見當らないから、今は新撰洋學年表から轉載するので滿足せねばならぬ。

安永七年細註暦

安永七年の暦で、竪六寸七分、横四寸四分五厘の一枚刷りを、四ッ折りにして、竪四寸五分、横一寸七分五厘の上下の開いてゐる小袋に入れられてある。暦の本紙に安永七年つちのいぬ風來山人戯作、袋の表に細註暦、不許賣買などの文字が記されてゐる。この集に添付したのは近森岩太氏所藏のものを原本大に複製したものである。

三　附　錄

源内の著作として、是非相半ばする、そしり草、里靄風語、世の中善惡鑑の三編の外、別に寶暦十二年に開催した藥品會の廣告竝に翌年四月の藥品會目錄（上集五九四頁參照）と寒熱昇降記（上集五八二頁參照）の復製とを添附した。なほこの解題略の末尾に不採用書目を擧げた。

そしり草

守屋大連、聖德太子、光明皇后、玄昉僧正、弘法大師以下源賴朝、藤原藤房、新田義貞、楠木正成等三十七人に仙人、宗論、論語談を加へた四十項を書目の示すかように誹謗したものであるが、既に先輩は源内の著作を疑つてゐながら。百萬塔、帝國文庫、有朋堂文庫等に源内の著作として載せてあるが、本集にはこれを眞僞未詳として附錄にのせた。

里鶴風語

洒落本大系第四卷里鶴風語の解題に、山崎麓氏は安永年間刊歟、風來散人は風來山人と同じで平賀鳩溪の別號であるとて、この書を源内の著作にしてゐるが、編者の寡聞では風來散人は風來山人と同じであると立證すべき確な文獻もなく、風來散人が風來山人と同一人であつて、平賀鳩溪の別號であると考へられない、從つてこの書が源内の著作であることを立證する何物も持たないから、今は附錄として登載したに過ぎない。原本　縱五寸三分、横三寸八分。

世の中善惡鑑

前後の二編に分れ、卷首に風來山人作とある。表紙の見返しに風來山人平賀先生作、東都玉養堂梓、裏表紙見返しに、書林下谷御成道唐人飴横町紙屋德八、京都菱屋治兵衞、同吉田屋新兵衞、大阪藤屋彌兵衞、江戸蔦屋重三郎、尾張菱屋金兵衞とあるのみで、刊年も判らない、果して源内の著作であるか、これを立證すべき何物もない、今はたゞ疑を存して卷末に附載した。原本　半紙半截形。

四　不採用書目

風來先生春遊記

明治十四年刊陳奮翰著、寢惚先生批評、醉多道士加評としてゐる上下二冊の小本がある、これを平賀鳩溪の著作としてゐるけれども、文章から見ても、源内の著作でないことが明瞭であるから附錄にも採らなかつた。

風來先生馬鹿理屈欠草（あくびぐさ）

卷首に耳目鼻口狂歌喧嘩の辨とあるが、文章は源内としてはあまりに拙であり、風來先生とあるが源内を指したのであるかどか判らないが、どうも源内の著作ではあるまいと信ずるから、この集には載せなかつた。

芬明開花窮理外傳

明治五年平賀源内遺稿、假名垣魯文の披閲、東京の書肆萬笈閣から上梓された一部五卷の書で、内容は「家藏に手を付す車のごとく廻すをしへ、金銀を望のごとくためるをしへ、價なしに、三國一の寶を儲るをしへ」など六十一項の秘法を述べたものである。外題に窮理外傳とあるけれども、本文の柱に極秘卷とあるから窮理外傳の名は後の改題ではあるまいか、魯文の序に「我國近來の物産家平賀源内鳩溪天竺浪人たりし頃、海外に漂流し、竺羅の澳の孤島に於て風來仙人より授與せられし、秘書中の拔萃にて上梓の儘書庫に秘し云云」とあるから、たとへ平賀源内遺稿とあつても、それは源内が或る書から拔萃したもので、源内自身の著述ではないからこの集には省略することとした。

平賀源内全集下目次

解題略……一—一三

戯曲集

神霊矢口渡……六七一
源氏大草紙……七四六
弓勢智勇湊……八二九
嫩葉相生源氏……九一五
前太平記古跡鑑……九八一
忠臣伊呂波實記……一〇六五
矢口後日荒御霊新田神徳……一一五七
霊驗宮戸川……一二四五
實生源氏金王櫻……一三三九

補遺

病名補遺序……一三八三
番椒譜……一三八九
番椒圖譜……一四〇八—一四〇九
俳諧三十棒……一四〇九
里笑草……一四七一
石の枝折……一四八七
畑苗代の傳……一四九〇
米麥種子選の傳……一四九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com